発達理論の学び舎

Back Number: Vol 131

Website:「<u>発達理論の学び舎</u>」



目次

- 2601. 旅について
- 2602. 永続的な夢の世界と隠遁生活の必要性
- 2603. 声部連結の解説書より
- 2604. フローニンゲンという街の素晴らしさ
- 2605. 作曲実践における新たな習慣と時間を超越するような曲に向けて
- 2606. 「信頼と裏切り」の夢
- 2607. 不気味な夢が開示したもの
- 2608. 「それ」
- 2609. 船旅と宇宙旅行
- 2610. 本当の音を求めて
- 2611. 月から地球に生還した感覚
- 2612. 旺盛な読書と作曲のパズル性
- 2613. 個性と創造性
- 2614. 金曜日のフローニンゲンの午後
- 2615. 静かな土曜日の朝に
- 2616. 失われゆく真理と叡智
- 2617. 無意識の騒ぎ
- 2618. 時空を超えた対話
- 2619. シュタイナーの芸術教育思想の探究に向けて
- 2620. アポロン神殿に向かう道

2601. 旅について

昨日の夕方、作曲実践の休憩がてら、この夏の旅行の計画について考えを巡らせていた。予定としては、八月にスウェーデンとフィンランド、そしてアイスランドを訪れようと思っている。アイスランドにだけ七月中に行き、スウェーデンとフィンランドへは当初の予定通り八月に足を運ぶのがいいかもしれない、などということも考えていた。幸いにもフローニンゲンの空港からアイスランドの首都レイキャビクへの直行便が出ていたように記憶しており、距離的にも全く遠くない。

ただし、六月末にロンドンでの学会参加を兼ねた旅行があるため、七月と八月に旅行に行くことは少し慌ただしいだろうか。やはり八月に三つの国に足を運ぶ方がいいかもしれない。今回は時間の都合上、それぞれの首都に滞在することになるだろうが、できるだけ自然が近くにあるような場所に宿泊し、街の中に出掛けて行くこと以上に自然の中でくつろぎたいと思う。

特にアイスランドを訪問した際は、レイキャビクから外に出て自然の中に入っていきたいと思う。欧州での三年目の生活は旅を積極的に行うことを通じて、人間が生きるとは何かについて見つめ直すことにしたい。それはすなわち自分の人生の見直しにも直結しており、自らの人生を深めることにもつながっていくだろう。

年内の旅行に関しては、八月に上記の三カ国を訪れ、十年以上の付き合いのあるドイツ人の友人に会いに行くために九月にはデュッセルドルフを訪れ、その帰りにボンに立ち寄る。十月には五年振りにボストンに行く。11月は旅に行くことをせず、今年の年末年始はイタリアとエジプトで過ごそうと思う。もしかすると、イタリアとエジプトへ訪れるのは時期が少し後ろにずれ込み、1月の半ばあたりからになるかもしれない。

そのようなことを昨日考えていると、ふと幼少時代の様々な旅行の思い出が蘇ってきた。振り返ってみると、旅に関して私は非常に恵まれた幼少時代を過ごしていたように思う。それは全て両親のおかげだ。話によると、私は生後数ヶ月から旅行に出かけていたらしい。生まれてから6歳まで東京にいた頃には、父が休みの際には東京から行ける範囲の場所に必ず旅行に出かけていたように記憶している。

山口県に引っ越してからは、中国・四国地方、そして九州を旅するようなことを絶えず行っていたように思う。また、私が中学校二年生の時に父がマレーシアに単身赴任になってからは、高校二年の春まで、春休みと夏休みはほぼ丸々マレーシアを拠点に滞在し、タイやインドネシアの旅行に連れて行ってもらっていた記憶がある。

そのように考えてみると、私は随分と色んな場所を幼少の頃から旅をしていたのだと知る。そして、 幼少時代のそうした旅がどれほど大きな意味を持つものであったかを最近になって強く実感してい る。

旅の持つ意義は本当に計り知れない。とりわけ幼少期に経験する旅は感性を育むことにつながっており、成人期になって行う旅は育まれた感性をさらに磨き、生きることの意味を再定義することを私に促してくる。

今この瞬間の自分は間違いなく、幼少時代に積み重ねてきた旅の経験が元に形成されている。記憶を辿る形で、私は今後もあの頃の旅を振り返るだろう。そして、旅の意義について今後も考えを深めていくに違いない。旅とは一体なんであろうか。旅が私たちに開示する意味はなんであろうか。

人生が未知であり、自己が依然として未知な存在であり続けているのと同様に、旅も未知な存在としてそこにあり続けている。そう考えると、人生、自己、旅は全て同一線上にある三点に思えてくる。いや、それらは点ではなく、三つが一つなった全てなのだと思う。人生、自己、旅はきっと全てであり、全部なのだ。フローニンゲン:2018/5/23(水)07:16

2602. 永続的な夢の世界と隠遁生活の必要性

この時期の早朝に見える赤紫色の朝焼けは本当に美しい。今日は残念ながらそうした朝日を拝むことはできなかったが、目が覚めた時に広がる空の輝きには思わず息を飲んでしまうことがよくある。

夢から覚めたのに、また夢の世界に戻ってしまうかのような幻想的な朝の世界がこの街にはある。 明日の朝は赤紫色に輝く朝日を拝みたい。明日は晴れるようであるから、早朝には幻想的な朝日 を、そして夕方には沈みゆく幻想的な夕日を眺めることができるだろう。朝方に夢を見て、夢から覚 めたと思ったらそこにまた再び夢の世界が広がっていて、夕方に夢を見たと思ったら再び夜に夢の世界の中に入っていく。日々は本当に夢の世界の中で展開されていくかのようだ。

日々が持つ夢のような性質について考えていると、今朝方の夢について思い出した。起床からすでに数時間が経ってしまっているため、記憶はすでに曖昧であるが、覚えていることだけを書き留めておく。

夢の中で私は、小中学校時代から今でも付き合いのある四人の親友と一緒にいた。そこでは昔話に花が咲いていた。すると、友人のうち二人が楽器の演奏を始めた。一人はフルートのような楽器を演奏し、もう一人は打楽器を演奏し始めた。

私は二人の演奏に耳を傾けていた。二人は私の方に向かって演奏をしているのではなく、目の前に広がる山の方に向かって演奏をしていた。私はフルートのような楽器を演奏している友人の後ろに回り、近づいてその音色を聴いてみた。近づけば近づくほどその音色がおかしいことに気づき、遠ざかれば遠ざかるほど綺麗に聞こえてくるという不思議な現象に立ち会った。

絵画作品を鑑賞する際に、あまり近づきすぎるのではなく、程よい距離を置くことが推奨されることがあるが、その原理に合致するかのような現象であった。私はあえて遠近の両側面から友人の演奏に耳を傾けていた。すると最後には、友人に近いところでその演奏に耳を傾けている自分がいた。そのような夢を見ていたことを思い出す。

ある対象に近づき、そして離れ、再び近づくことを示唆する夢。遠近両方の側面からこの世界を見ること・感じることの意義を暗示するような夢のように思われた。

今自分はどこに住んでいるのかを改めて考えた。これは問う必要など全くないのだが、そう問うてしまった自分がいる。私はオランダのフローニンゲンという街に住んでいる。以前訪れたデン・ハーグのスピノザ記念館に関する記憶が蘇り、スピノザに多大な影響を与えたデカルトについて考えが及んだ。デカルトは人生の途中においてフランスからオランダに移住し、そこで隠遁生活を送り始めたことを思い出した。

先ほどそれはいつ頃のことだったのかを調べてみると、デカルトが32歳の頃であったことがわかった。 まさに今の私と同じ歳の時にデカルトはオランダで生活をし始めたのである。オランダに移住したデカルトはそこで天啓を受け取り、本格的な哲学探究に取り掛かり始めた。啓示的なものを受け取り、オランダの地で隠遁的な生活を送ったデカルトの姿と今の自分の姿を妙に重ねてしまう自分がいる。

デカルトへの共感の念が徐々に強くなっていく。この二年間において、デカルトがオランダで隠遁 生活を送っていたような生活を私は送っていた。この地での三年目の生活はもっとそれを推し進め ていく。隠遁生活というのは全くもって否定的なものではない。

必要なことは、外部との「無駄な」接触を絶つことである。精神的にも身体的にも、外部との無駄な接触は徹底的に絶つ。隠遁生活というのはそうした形で醸成されるものであり、そうした生活を通じて自らの仕事に取り組むことが最大最善の世界への関与だと思う。とにかく欧州での三年目の生活はそうした生活態度をより推し進めていく。フローニンゲン:2018/5/23(水)10:22

2603. 声部連結の解説書より

今日は午前中から"Voice Leading: The Science Behind a Musical Art (2016)"と"Ancient Greek Music (1992)"を読み始めた。"voice leading"については昨年に作曲を始めた当初から耳にする言葉であったが、これが日本語でなんと翻訳されているのかについてはこれまで調べたことがなかった。どうやら「声部連結」という訳語が当てられているらしい。本書を読み進めてみると、昨年に履修していたオンラインの作曲講座では触れられていない声部連結のルールが数多く存在することを学んだ。

本書はタイトルにあるように、科学的な観点から声部連結のメカニズムを解き明かすものであり、とりわけそれが音楽の聴き手に及ぼす認知的な効果について解説を加えている。科学的な発見事項として随分と興味深いものが多く、その発見事項を念頭に置きながら作曲をすれば、曲が持つ諸々の作用や効果を引き出すことにつながりうるという確信を得た。

例えば、それは以前から私が関心を持っていたような、曲を通じた意識の治癒及び変容の実現で ある。この実現に向けて、学ぶべきことは無数のように存在しているが、本書はその実現に向けてま た新しい一歩を歩ませてくれたように思う。声部連結というテーマに関しては、その他の書籍にあれ これ手を出すのではなく、とりあえず本書を何度か繰り返し読むことによって、以前履修した作曲講 座では触れられていなかった規則を学び、声部連結に関連した諸々の実証結果に関する知識を 得ていきたいと思う。

兎にも角にも今の私には音楽言語の体系が内側に確立されていないので、その確立に向けた読書は今後も積極的に行っていきたい。例えば、作曲関係の書籍を毎日一時間程度でいいので読んでいくというのは新たな習慣にしたい。これを習慣化し、それを毎日何年か続けていけば、音楽言語の体系が自ずと内側に構築されていくだろう。そうした体系が長大な時間をかけて自ずから構築されていることが重要なのであり、短期間で人工的に構築することは避けなければならない。

静かに自然と内側から醗酵させていく。そうでなければ、構築された体系は脆弱であり、脆くも崩れ去ってしまうようなものになってしまうだろう。外国語を毎日学ぶかのように、その他の習慣を実践するのと全く同じように、音楽言語の習熟に励みたい。ただしここで注意しなければならないのは、私は決して音楽言語の専門家になるつもりはないということである。

つまり、既存の楽曲を分析したり、音楽理論について語ることには一切関心がない。私がとにかく実現させたいことは、絶えず曲を作ることである。 傍観者的に曲の分析ができることは、私にとって本質的な意味をなさない。 音楽の分析をすることはそれを専門とする人たちに任せておけばいいのである。

とにかく作り続けること。作り続けるための補助として音楽を分析する観点を獲得していくに過ぎない。作曲に関する重要な学びは、理論書の中にあるというよりも、過去の偉大な作曲家が残した楽譜の中にあり、そして何より、自らの作曲実践の中にあるということを忘れてはならない。とにかく曲を作り続ける過程の中で知識と技術を洗練させていく。フローニンゲン:2018/5/23(水)13:11

2604. フローニンゲンという街の素晴らしさ

フローニンゲンの街の良さを再確認するような日であった。今、燦然と輝く太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。時刻は夕方の四時半を迎えた。今日は三時前あたりに街の中心部にある役所に向かった。

欧州での三年目の滞在にあたり、その手続きの方法を聞きに街の役所に向かって自宅を出発して みると、今日は随分と暖かいことにすぐに気づいた。気温はかなり高くなり、半袖で外出するにはもっ てこいの天気であった。役所に訪れるのは今回が初めてであるが、その近くには行きつけのインド ネシア料理店があり、役所の周辺の地理は理解していた。あえて今日は普段通らないような道を歩 いてみると、随分と色んな発見があった。

これまで見逃していた小さな教会や骨董屋など、この街にはまだ私の知らなかった場所がたくさん あることに気づかされた。役所に到着すると、そこはとても綺麗な建物であり、すぐに担当の人と話 すことができた。対応は迅速であり、説明も実に親切であった。今年の九月に修士課程を終えることになり、その後三年以内であればいつでも一年間ほどオランダで滞在できる許可を得ることができる。

この制度の本来の目的は、オランダで仕事を見つけることやインターンとして働くことを斡旋するものだが、私はどこかの組織に属して働くつもりはなく、欧州の地で探究活動を継続させるためだけにこの制度を利用する。

昨年すでにフローニンゲン大学での一つ目の修士課程を終えており、今回の二つ目の修士課程 の修了をもって二回この制度に申請できるのかは定かではない。仮にその適用可能性があり、今 後数年以内に再びオランダに戻ってこられる可能性を保持するためにも、昨年修了したプログラム の証明書を活用して今回の制度を利用しようと思う。

今週の土曜日にオランダ政府のウェブサイトに行き、必要書類をダウンロードしておきたい。申請から許可証を得るまでに長くて三ヶ月ほどかかるそうなので、七月の半ばあたりに申請書を提出したいと思う。提出が済めば、申請をしたことを証明する書類をもらえるそうであり、それさえあれば仮に現在の滞在許可証の滞在期間が過ぎても問題なくオランダで生活ができると聞いた。

担当してくれた方にお礼を述べ、私は役所を後にした。今日が平日とは思えないほどに街の中心 部には観光客らしい人がたくさんいた。これはいつものことかもしれないが、今日はいつも以上に平 日が休日に思える。それぐらいに陽気な雰囲気が街全体を包んでいる。 中央市場の石畳の道を歩いている最中、マルティニ教会の荘厳な鐘の音が聞こえてきた。私は思わずその場で立ち止まり、鐘の音に聞き入っていた。フローニンゲンは落ち着いた良い街だと改めて思う。でなければ三年もこの街にいることはないだろう。

この十年を振り返ってみた時に、同じ街で三年以上過ごすのはフローニンゲンが初めてだということに気づいた。個人的にこれはとても驚くべきことだった。それほどまでに私はこの街に愛着を感じているのだろう。また、フローニンゲンという街が私を捕まえているとも言えるかもしれない。いずれにせよ、さらにもう一年落ち着いたこの街で生活できることを嬉しく思う。

役所を訪れたその足で、私は行きつけのチーズ屋に立ち寄った。いつもと同じチーズとナッツ類を 購入した。すると店主の女性が何やら奥から小さな物を取り出し、私に手渡した。見ると、それはハート型のチーズだった。

店主:「私の妹がこの間結婚したのよ。その記念に作ったチーズをあげるわ」

店主は微笑みながらそのように述べた。私はお礼を述べながらそのチーズを受け取った。

様々な場所に様々な幸福が絶えず訪れる。ここにも小さな幸福があった。

この街でもう一年生活できることがこれほど幸せなことだとは思わなかった。暖かい太陽の光が射す中を、私は幸福を噛みしめながら歩いていた。フローニンゲン:2018/5/23(水)17:08

2605. 作曲実践における新たな習慣と時間を超越するような曲に向けて

今日も一日が終わりに差し掛かっている。昨日と同様に、今日もあっという間に時間が過ぎた。それ も非常に濃密な時間感覚を持ってだ。

時刻は夜の八時半を迎えたが、外はまだまだ明るい。もうしばらくすると、太陽が一番長く出る時期に差し掛かるのではないかと思う。ゆっくりと暮れ行く夕日を眺めながら、今日の振り返りを行いたい。 今日は昼食後に作曲実践を行った。 学術論文の執筆に目処がついたため、幸運にも自由な探究時間と作曲に充てるだけの十分な時間がある。欧州の三年目は、読みたい本を読みたいだけ読み、書きたいだけ文章を書き、作りたいだけ曲を作るような生活を送る。そしてそれは欧州での三年目だけではなく、それ以降にも永続して行われるような形にしたい。今後の人生は日々をそのように送る。そのように送ることを許さないものからは離れていくことにする。

今日はいつものようにバッハに範を求めて曲を作った。今日から少しばかり工夫を凝らし始めた。 参考にする曲を決めたら、まずはその曲の楽譜を目で追いながら注意深く聴く。楽譜を目で追うことによって初めて見えてくるものや感じられるものがあることは以前に述べた通りだ。

何回かそのようにして曲を聴いたら、楽譜から一旦離れ、引き続き繰り返しその曲を聴く。その過程 の中で喚起される内的感覚を楽譜の中にデッサンとして絵で表現することを今日から本格的に行 い始めた。これに対して明確な意図はなく、何かを期待しているわけでもない。それをする必然性 のようなものを感じるだけだ。あえて言うならば、ある曲が今の自分に引き起こす固有の感覚を形に しておきたいという意図がある。この実践を毎日続けていくことによって何が得られるのか、あるいは 何も得られないのかはわからないことであり、それほど重要なことではない。

とにかく、自分の内側で形になろうとするものを形にしていくことだけが重要になる。形を求めるものに形を与えること。あえて言えばそれが究極的な目的だ。曲を聴きながら純粋に知覚された内的感覚、あるいは内的ビジョンとしてのイマージュを楽譜にデッサンとして描いた後に作曲を始めることにした。そのようにしてバッハの曲を参考にして一曲作った後に、今度は自分で作った曲を繰り返し聴き、ここでも再び純粋に知覚された内的感覚を今度は作曲ノートにデッサンする。そのようなことが習慣になりつつある。

午前中に音楽理論に関する書籍を読み進めていると、古典的な作曲形式である、問いの提示による解決というプロセスの中にカタルシスをより明瞭にもたらすにはどうしたらいいのかを考えていた。端的には、提示した問いを解決する時に何かしらの治癒的作用や変容作用をもたらす仕掛けを埋め込むことはできないかと考えていた。いくつも突発的なアイデアが思いつき、例えば、あえて問いは混沌としたものを作り、そこに凝縮された秩序を生み出すことによって感情的・精神的なカタルシスを引き起こすことはできないかと考えていた。

自然言語に習熟し、習熟した技術を持って文章空間を構築することによって意識に治癒と変容をもたらすことが可能なように、音楽言語に習熟すれば同様のことが可能になるのではないかという考えを持っている。それは期待であり、同時に仮説だ。

最後に、以前から関心のあるテーマとして、「曲は時間に埋め込まれている」というものがある。作曲をする際に、パソコン上のソフトを立ち上げ、最初に楽譜を新しく作り、そこではまず時間スケールを決める必要がある。もちろん後になっても時間スケールを決めることはできるが、音楽は時間という概念と密接に関係していることがわかる。曲を作り始めると、曲は楽譜の左から右へと進行していく。

その進行は時間の進行に他ならない。そのように考えてみると、曲とは本当に時間に埋め込まれたものなのだと知る。一方で、私がさらに関心があるのは、曲は不可避的に時間に埋め込まれたものだが、生み出された曲が時間を超越していくかのような感覚を引き起こすためにはどのような条件が必要なのかという点である。言い換えると、時間に埋め込まれた曲を時間から解放させる手立ては何かないか?ということだ。

時間に埋め込まれた時間を超越するような曲。そのような曲をどのようにすれば作ることができるのかを今後長い時間をかけて考えていきたい。フローニンゲン:2018/5/23(水)21:01

2606. 「信頼と裏切り」の夢

今日はここ数日に比べて少し遅めに起床した。六時前に起床し、六時半あたりから一日の活動を 開始した。

今日も昨日に引き続き、晴天に恵まれるようだ。時刻は六時半を迎え、早朝のこの時間帯は雲一つない青空が広がっている。今日から一週間は小雨が降る日もありながらも、最高気温は25度を越す日が続く。フローニンゲンは初夏に入ったようだ。

六月のフローニンゲンの平均最高気温が20度だということを考えると、この一週間の気温はずいぶんと高い。また、フローニンゲンの気温が最も高くなる七月と八月の平均最高気温ですら22度であることを考えると、初夏というよりも今週は夏のようだと思った方がいいかもしれない。

早朝の優しいそよ風が吹き、小鳥が街路樹の木々に止まって美しい鳴き声を発している。昨夜も就寝前に小鳥たちの鳴き声を聞くことができた。夜の鳴き声の響きと朝の鳴き声の響きは随分と印象が異なる。夜の響きはどこか神秘的であり、瞑想的だ。一方朝の響きは、清朗感に溢れている。

小鳥の鳴き声を聞いていると、今朝方の印象的な夢を思い出した。特に二つの場面を覚えている。 夢の中で私は、ある街の会議室の中にいた。会議室の一階にある部屋の中で、別に会議をしてい たわけではなく、小中学校時代のある友人と雑談をしていた。

会議室の窓から外を眺めると、遠くの方にある工場から煙がもくもくと立ち上がっているのが見えた。 その工場の持ち主は日本のある有名な製薬会社である。私はその煙を見たとき、その工場から出 ているものだとは思わなかった。というのも、その煙の色は汚れた様子はなく、真っ白であり、工場 が出すような煙とは似ても似つかなかったからである。

その白い煙は上空に向かっていくにつれて一本の明確な線になっていくかのようであった。それは 地上から上空10,000メートルまで立ち上っている、と直感的にわかった。隣にいた友人にこの煙に ついて指摘すると、友人もその煙を眺めた。

友人:「あぁ、あれは工場から出ている煙だね」

友人は何気なくそのように述べた。私はそれを聞いて初めて、その煙が工場から出ていることに気づいたのである。友人がそのように一言述べた後、先ほどまでは真っ白だった煙の色が濃いい灰色にみるみるうちに変わっていった。害のありそうな色を持つ煙が瞬く間に現れた。

しかも、地上にあるところの煙は厚みを増し、それがうねるようにして遥か上空の方に立ち上っていった。一直線ではなく、それはアーチを描くように、まるで地上から上空に掛かる橋のように思えた。 私は会議室の窓越しから、うねるようにして上空に向かう煙の様子をぼんやりと眺め続けていた。そこで夢の場面が少しばかり変わった。

会議室を出た私は、近くの駅に向かって歩き始めた。途中、以前はメインの駅であったはずの場所が今はもう古びていることに気づいた。少し前に、その古びた駅に向かって掛かっている歩道橋が

崩れたことがある、という話を思い出した。そんな記憶を辿りながら、私は目的の駅に向かって歩き 続けた。

駅に到着すると、駅の前には街路樹がたくさん植えられており、強い日差しを防ぐことができた。今日はとても暑い一日であり、歩いていると汗が自然と滲み出る。そんな暑さをしのぐにはもってこいの日陰が駅の前にいくつもあった。実際に、道行く人たちの多くもそこでひと休みしている。

私も少しばかり日陰で休憩し、しばらくしてから駅の中に入った。すると突然、その場が駅ではなく、 不思議な洞窟のような場所に変わった。そこには係員のような男性が一人と、向こうの方には何や ら長蛇の列があった。私は係員の男性に話しかけ、長蛇の列の理由について聞いてみた。

係員の男性:「皆さんあるアトラクションに参加しようと思ってるんですよ」

私:「アトラクション?」

係員の男性:「ええ、この洞窟の先には底の見えない穴があって、そこに向かって飛び込むアトラクションです」

係員の男性は笑みを浮かべながらそのように述べた。しかし、アトラクションの概要だけを聞くとあまり笑えるものではなかった。

実際にどのようなアトラクションなのか少しばかり関心があったので、私は長蛇の列の先頭まで行ってみることにした。そこにはぽっかりと大きな口を開けたような不気味な穴があった。

私は恐る恐るその穴の方により近づいていき、穴の奥を確認すると、穴の途中から深い青色の水が湧き出ていることに気づいた。この洞窟自体も暗かったが、真っ暗の不気味な穴の奥に湧き出る水はどこか気味悪く、それでいて不気味な魅力を持っていた。その場にもまた別の係員の男性がいたので、もう少しこのアトラクションについて聞いてみた。

私:「このあとアトラクションはどのように開始されるのですか?」

別の係員:「ええ、まず二人一組になっていただきます。一人の方にある英語の文字が背中に入った防水ジャケットを着てもらい、その方にまず最初に穴の中に飛び込んでもらいます。そして、もう一人の方が続けて穴に飛び込んでもらうところからスタートします」

私:「二人のペアを作って、まずは一人の方が穴に飛び込むのですね?」

別の係員:「ええ。ですが厳密には、穴の中間地点に湧き出る水の箇所までは二人一緒に降りていくことが可能です。穴の壁に沿ってゆっくりと降りていっても大丈夫です。そこから水の中に飛び込んでいく時には一人一人になります」

私:「最初に水の中に飛び込んでいく方の防水ジャケットに英語の文字が入っていると聞きましたが、それは・・・」

別の係員:「あぁ、それは後ろの方が付いてこれるように発色加工されたジャケットです。そこに刻まれている英語の意味は『信頼して私に付いてきて』です」

私:「なるほど」

別の係員:「すでにお気づきかもしれませんが、このアトラクションの後半からはとても過酷な状況が待ち受けています。深い水の中を無限に泳いでいくことが二人に課されています。仮に先頭の人の泳ぐ速度が早い場合、後ろの人はたちまち道を見失ってしまい、無限に続く水の中に閉じ込められてしまうことになります。また、先頭の方の泳ぐ速度が遅い場合にも後ろの方は不満の感情が溜まってくるでしょう。途中途中に休憩地点がありますが、アトラクションが始まってからは水の中にいるので、二人の間で言葉でのコミュニケーションは一切できません。コミュニケーションが全く取れない過酷な状況の中で、いかにコミュニケーションを取りながらゴールに向かっていくかがこのアトラクションを攻略する大事な点になります」

私:「そのような内容のアトラクションなんですね。お話を聞いていると、このアトラクションの主題は何やら・・・」

別の係員:「ええ、『信頼と裏切り』です」

私は「信頼と裏切り」という言葉を聞いて背筋がゾクゾクとした。気づけば私は他の人たちに優先してもらう形で長蛇の列の先頭にいて、このアトラクションに参加する決意を固めていた。

大きな口を開けた穴を見ると、その深さに思わず息を飲んだ。私は自分の相方が誰かもわからずその穴に向かっていこうと決心した。「信頼と裏切り」という言葉がもう一度自分の脳裏によぎり、身震いをしながらも、私は不気味な笑みを浮かべていた。フローニンゲン:2018/5/24(木)07:19

2607. 不気味な夢が開示したもの

今朝方見た夢について書き留めていると、その夢についてあれこれとまた考えている自分がいた。 夢の中の二つの場面はどちらも不気味な雰囲気を漂わせていた。二つの場面の中で喚起されて いた感情をもう一度思い出す前に、私は一旦書斎の窓の外から青空を眺めることにした。そこには 鮮やかな青空が果てしなく広がっていた。

今もまだこの青空を眺めている。空には雲一つなく、遠くの空の下を飛ぶ鳥たちの姿が見える。また、今この瞬間には小鳥の鳴き声が聞こえたり、目の前の道路を走る車の音が聞こえたりする。

先ほど思い出していた夢が象徴するものは一体何だったのだろうか。一つ目の場面で印象的だったのは、上空10,000メートルまで続く橋のような煙である。あの煙のうねった姿がとても印象に残っている。あの煙はうねりながら空に向かって上昇していた。あたかも滝が逆に流れるかのような勢いで、しかもそれは螺旋を描きながら天高く向かっていた。

ここでふと、それはヨガの伝統で言うところの身体エネルギーの上昇過程に似ていると思った。螺旋を描きながら、うねるようにして立ち昇って行くエネルギーの様子と、夢の中の煙がうねりながら天高く上昇している姿が重なった。一方で、最初は真っ白な煙であったものが、最後には灰色の煙になったことについても考えてみる必要がある。最初の真っ白な煙はもしかすると、身体エネルギーの上昇過程の最後に待つ白い光の状態を暗示しているように思える。

実際に、天空にほど近いところにある煙は白い光の筋のように見えていたことを覚えている。そのような特徴を持つ煙も、友人からの一言を境目に突然灰色になっていってしまった。工場の煙である

ものを煙ではないと認識していた時には、それが雲のようなものに思われ、その先に白い光の束が 見えた。だが、友人が「あれは工場の煙だ」と述べたことをもってして、突然に色が変わり始めた。

なぜ色が変わってしまったのだろうか?それは一つには私の認識が変化したからだろう。また、そうした認識の変化を起こした友人の存在にも注目する必要がある。夢の中にいた友人を非難するわけではないが、彼のあの発言がなければ、あれは白い光のままに天に到達していたように思う。昨夜考えていたように、もしかすると友人と雑談をしていたことは、「外部との無駄な接触」に該当するものだったのだろうか。

認識を曇らせることなく、自分の眼で対象ととことん向き合うこと。それを示唆する内容の夢だったのかもしれない。

それでは二つ目の夢の場面はどうだろか。二つ目の夢の場面もとても印象に残っている。暗い洞窟の先に待っていた、底の見えない巨大な穴。その穴の途中からは濃く深い水の世界が待っていて、そこに向かっていこうとする自分がいた。夢の中の世界にあるさらに深い世界。無意識の中のさらに深層的な意識世界。

実際のところ私は、水に向かって飛び込み、名前の知らない相方の背中を追いながら泳いでいた。 視界に入るのはその人物の背中しかなく、あとは全く何も見えない水の世界だけがそこに広がって いた。星のない宇宙空間を漂う感じだと表現すればわかりやすいだろうか。光は一切なく、ある人 間の背中だけが見える。

しかもその人物が来ている防水ジャケットに刻まれた英語の文字だけが浮き上がって見えてくるかのようであった。「信頼して私に付いてきて」という意味の文字は、最初は認知的に理解することができる。だが奇妙なことに、水の中を泳げば泳ぐほどに、その文字は認知的に解釈できない別の意味を帯び始めていた。より正確には、そこにはもはや私たちが意味だと思っているような意味はなく、直接的なある感覚だけがそこに存在していた。

相方の防水ジャケットに刻まれた文字が一つのマントラのように私の感覚に働きかけていた。意味を生成する認知能力を働かせることをやめ、より原始的な直接感覚だけを働かせながら私は水の

中を泳いでいた。そもそも深い水の世界を泳いでいくことが「アトラクション」とみなされていたことも興味深い。しかも、このアトラクションに参加したいと望む人が数多くいたことには驚かされる。

だが仮にこのアトラクションが人間の無意識のさらに深い階層を探求することを目的にしているのであれば、多くの人たちが関心を寄せる理由というものがなんとなくわかってくる。また、穴の前に立っていた係員が述べるように、このアトラクションに参加することは無料かつ自由だが、ひとたび相方の背中を見失ったら、水の世界から逃れられないことを意味していた。

宇宙空間のような水の中を永遠と泳ぎまわり、のたれ死ぬということがこのアトラクションで起こりうることであり、直感的に私は、参加者のほぼ全ての人がこの結末を迎えることに気づいていた。それでも私はこのアトラクションに参加しようと思ったのはなぜなのだろうか?しかも、穴に飛び込む前に不気味に微笑んでいた自分がいたのはなぜだろうか。

このアトラクションの主題である「信頼と裏切り」ということ以上に、私はこのアトラクションの隠れた主題を見出しているようだった。それはもしかすると、「死への憧憬」というものだったのかもしれない。より厳密には、このアトラクションには永遠に至る道と永遠の中で死ぬ道の二つが用意されており、それはどちらも共に不確かな形で自分の眼の前に提示されていた。

どちらであっても、そこに「永遠」というものが関係していることがわかる。もしかすると私は、死に対して惹きつけられるものを感じていたのではなく、その死の向こう側にある永遠なるものに惹きつけられていたのかもしれない。そう考えてみると、このアトラクションの参加者のほぼ全てが永遠に水の中で泳ぎまわり、のたれ死ぬことを知っていながらも、何のためらいもなく穴の中へと飛び込んでいった気持ちがわかってくる。

天への上昇、螺旋状のエネルギーと白い光、無意識の世界のさらに奥に広がる深層世界、信頼と 裏切りという人間の不可避的側面、死と永遠、そのような主題が浮き彫りになるような夢だった。夢 について書き留めてみると、この夢は私が思っていたよりもずっと深い意味を持っていたことに気づ かされた。明るみになった主題について今後も考えていくことになるだろうが、同時に夢を書き留め ることを今後も継続させていきたいと改めて思う。フローニンゲン: 2018/5/24(木) 07:58

No.1033: The Season of Fresh Greenery

To compose music seemed to become my daily practice in the early morning. Groningen in this season is shining with green leaves. Groningen, 07:47, Wednesday, 6/27/2018

2608.「それ」

青空の広大さと小鳥の鳴き声の美しさはわかる。確かに今も晴れ渡る大空を眺め、小鳥の鳴き声に 私は耳を傾けている。しかし、そうしたこと以上にどうしても今朝方の夢の内容がまだ気になる。夢 の内容については早朝から随分と書き留めた。そのため、内容そのものについてはもはや言及す る必要はほとんど無い。

だがなんとも言えない感覚が自分の内側の中に蠢いていることは確かである。このざわざわする感覚は一体なんだろうか。こうした感覚こそ外側に形として残していくべきなのだ。一刻も早くこうした感覚を曲として表現したいと思う自分がいる。

このざわざわした感じは、内側にあるものが外側に出てこようとする衝動に違いない。あるいは、形を求めてやまないものが形を求めている叫びにも似た衝動だと言っていいだろう。そのような感覚が今の自分の内側にある。こうした感覚を曲として形にしていくための技術を今日も高めていく。今はなんとか言葉や絵を通じてこうした感覚を形にしている。

それが行えるだけでも幸いであり、仮にそれらを言葉や絵を通じて形にしなければ自分は一体どうなってしまうのだろうと思う。

今朝方の夢の中で露わになった「死の先にある永遠への憧憬」によって引き起こされる感覚を曲として表現したい。さらには、そこで知覚される内的ビジョンについても音楽として表現する。内的ビジョンについては「イマージュ」などの別の呼び名もあるが、いずれにせよ、そうした色と形を伴う心的現象を曲の中で表現していく。それを実現するためには、これから相当な修練が必要だろう。

前途多難であることは明らかだが、そこに向かっていく。向かっていかざるをえないものが自分の内側で蠢いており、それが自己を突き動かしている。

予定では午前中の読書を始める時間を迎えたが、このようにして文章を書き留めている。読書など 優先されるべきものではない。自分を捉えてやまないものを文章として書き留めること。それこそが 最優先されるべきものだ。

自己を深めるのは誰なのか?それは自己だ。自己そのものに他ならない。より厳密には、自己を突き動かす「それ」が自己を深める。自己を深めるものはそれ以外にない。外面をなぞるだけの読書など全くもって意味がないのだ。それは自己の内側に情報をもたらすことはあっても、自己を真に深めなどしない。

自己を真に深める「それ」を形にすること。それを行うことによって初めて、自己が新たな形になっていく。自己を捉えてやまないものが内側を走ったら、それを捕まえる。そして、それを文章として書き留める。これからはそれを絵として、さらには曲として形にしていく。

ここで私は、読書の意義を否定しているわけでは決してない。自己を深めるために読書をすること。 それは何ら強調する必要性のない当たり前すぎる事柄である。毎日書物を読むというのは当たり前 すぎる行為なのだ。それを強調しようとする現代の風潮はどこかおかしい。また、それを強調しようと する個人はどこかおかしい。書物を読むなんて当たり前だろうと私は思う。

「書け、書け、書け」という内側の声が小鳥の鳴き声をかき消す。二羽の小鳥が戯れながら書斎の窓の方に近寄ってきた。それを見て、心が休まる。この世界には当たり前のことをしない人間が多すぎるのではないかと思う。日々を充実感と共に生きること、日々を幸福感の中で生きることは当たり前であるべきことのように思える。

自己を深め、世界へ関与しながら自己の人生を深めていくこと。これも当たり前すぎる事柄だ。さらには、書物を読むこと。これも自己を深めていく際に不可避な事柄である。だが、人は書物を読むことを強調し、書物ばかりを読みたがるが、自分の毎日が、そして人生が一冊の巨大な書物であることに気づかないのはなぜか。また、そうした巨大な書物を自分で執筆していかないのはなぜなのだろうか。

自らの人生を著述できない人間に自らの人生を歩むことなど可能なのだろうか?他人の執筆した 書物の中だけで生きる人間。自己の人生を自ら著述しようとしない人たち。 相変わらず「書け、書け、書け」という内側の声が聞こえて来る。この世界をなでるような穏やかな風が吹き、街路樹の木々が小さく揺れている。フローニンゲン:2018/5/24(木)08:36

No.1034: A Bridge of Adoration

Sometimes I don't know where I'm walking in this life. When I wander around a bridge between this world and the other world, I find the bridge to be replete with adoration. Groningen, 08:08, Wednesday, 6/27/2018

2609. 船旅と宇宙旅行

今日も非常に天気が良い。時刻は夕方の四時を迎えた。フローニンゲンにおいてはこの時間帯が一番気温が高くなる。確かに日差しは強いが、そこには凶暴さはない。それよりもむしろ、この時間帯の太陽はどこか祝福に満ちた光のように思える。

今日も午前中から、何かに取り憑かれたかのように書物を読んでいた。論文の提出を終える六月の 半ばからは本格的にこうした生活を一年間送り続ける。そしてそれはこの一年間のみならず、今後 も継続していくだろう。こうした憑依性が自分のこれからの生活から失われることはないと思われる。

何かに憑依され、何かに帰依している感覚が内側にある。それを通じて残りの人生を生きて行くことになるであろうという直感めいたものがある。不思議なことを考え出す夕方だ。もしかするとこれは、 今朝方に見た印象に残る夢のせいかもしれない。早朝にこの夢についてはあれほどまでに文章を 書き留めておいたのに、まだ夢の体験が完全に消化されていないかのようである。

一つの体験はそうやすやすと消化されるようなものではないということがわかる。 じっくりと時間をかけ、省察を伴った形で緩やかに咀嚼されて行くようなものなのだ。

夢について書き留めてからも、幾分不思議な意識状態が続いていた。もしかすると今この瞬間もそうした意識状態にあるかもしれない。雄弁でいて、とても静かな感覚が内側に広がっている。そうした感覚の中で今この瞬間を生きているという実感がある。

午後、読書の手を止めて、ふと船旅について考え始めた。昨年の暮れあたりに突如として船旅への 憧れが強くなり、何かに目覚めたかのように船旅について時々思いを巡らせるようになった。仮に 今後日本に一時帰国する際には何とか船を使って欧州から戻れないかを調べていた。調べてみる と、どうしても日本が発着地点になっていたり、欧州の国々の船旅しかないようだ。

欧州から片道で日本に行ける船旅は存在していないのだろうか。いずれにせよ、日本に一時帰国するしないに関わらず、今後数年以内に一度船旅に出かけてみたいと思う。最初は期間の短い船旅で良いかもしれない。地球を一周するような長期間の船旅は、もう少し時を経て、諸々の準備ができてから行うことにする。

一度船旅を経験すると、もう飛行機での移動は極力控えるようになるかもしれない。家族でいつか 船旅に出かけることを想像する。船上でのゆっくりとした時間の流れ。旅の途中途中に出会う人々と 街。少しばかり想像の世界の中に浸っていた。再び読書に戻り、数時間ほど書籍を読んでいると、 今度は宇宙旅行について関心が飛んだ。

南カリフォルニアに住んでいた今から五年前のある日曜日に、アーバイン大学の図書館に向かって歩いている最中にふと、宇宙旅行に出かけてみようという気持ちになった。大学近くのショッピングモールと大学をつなぐ大きな歩道橋の上でそのような気持ちになったことを覚えている。

再度宇宙旅行について調べてみると、個人が参加できる宇宙旅行をいくつかのアメリカの企業が提供していることを知った。その案内資料に興味深く目を通していた。船で世界を一周する旅と宇宙に出かけていく旅への想いが徐々に醸成されていく。それが真に発酵される時がやってくるためには、自分にできることを日々行っていくことが大切になるだろう。フローニンゲン:2018/5/24(木) 16:29

No.1035: A Water Vessel

A new day that looks like a flow of transparent water began. The sky is like the ocean, and it looks like a gigantic vessel of water. Groningen, 07:14, Thursday, 6/28/2018

2610. 本当の音を求めて

時刻は夕方の七時半を迎えた。夕方まで晴れ間が広がっていたが、今は空に薄い雲がかかって おり、今日は西日が強くない。小鳥の鳴き声が遠くの方でこだましている。

先ほど、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授からメールがあった。ツショル教授はいつも本当に丁寧に論文のドラフトを読んでくださる。そして、細部に囚われない形で非常に重要な箇所について的確なフィードバックをいつも数多く与えてくださる。今回のドラフトに対してもそのようなフィードバックをしてくださった。

ちょうど明日の午後にミーティングがあり、今日メールに添付されたワードファイルへのコメントについて改めて意見をもらうことになるだろう。明日の午前中に頂いたコメントを丁寧に読み、ミーティングで何を議題として取り上げるかを事前に設定しておきたい。おそらくミーティングは明日ともう一回ほどだけとなり、論文のドラフトをレビューしていただくのもあと一回だけになりそうだ。ここまで丁寧に指導をしてくださる教授もなかなかいないだろう。

ツショル教授はイギリスで博士号を取得しており、その時に受けた論文指導同じような形で私を支援してくださっているのかもしれない。ここまで二人三脚で時間をかけて取り組んできた研究であるから、やはり今回の研究論文を査読付き論文にするか、少なくとも論文を短くまとめ直したものをどこかの学会で発表するようにしたいと思う。

なぜ創造的になれないのかを人は嘆くかもしれないが、それは自己と繋がっていないからだという 考えが午前中に湧いてきた。自己は本質的に創造的であり、絶えず新たなものを創造するという特性を持つ。自らが創造的ではないというのは、本来の自己の機能を喪失しているからなのではないかと思う。自己の本来の機能を取り戻すということ。そのためには、自己と繋がる必要性がある。

創造的であるというのは自己であるということだ。創造的ではないというのは自己ではないということなのだ。絶え間なく自己産出を続ける自己と深くつながることを意識する。この世界には、自分と自己を切り離そうとする力と誘惑がある。そうした力を乗り越え、そうした誘惑を断ち切っていく。

夜の八時に近づいても小鳥の鳴き声が止むことはない。朝から晩まで鳥たちは元気だ。今、様々な種類の鳥たちが鳴いている。一日の終わりに向けて最後の大合唱を奏でているかのようだ。ここから鳥たちの鳴き声の響きが黙想的なものになっていくことを知っている。昨日もそのように思った。今日もそのようになるだろう。

書斎にいる間は基本的に常に音楽をかけているが、いつか音のない音で満たされた自然の中に 入っていく必要があるかもしれない。今聞こえてくるバッハの音楽は、人工的に作られたものとして は間違いなく傑出した美を持っている。そうした音に毎日触れることは幸福感をもたらすが、いつか そうした音さえも一度断ち切り、自然の中に還っていくことが必要な気がふとしている。過去の作曲 家が築き上げた音の世界に深く入った後に、あえて一度その世界から離れていくのである。

それを経ることによって、初めて本当の音が聞こえてくるような気がしてならない。それは間違いなく 自分の内側の音になるだろう。自分の内側の音を見つけるために、深く音の世界に入り、音のない 自然の中に浸るということを近々行うかもしれない。自分の内側にある本当の音とはどのようなもの なのだろうか。

小鳥たちが発する彼らにとっての真実の音に耳を傾けていると、そのようなことをふと考えさせられた。フローニンゲン:2018/5/24(木)19:57

No.1036: The Cool and Windless Morning in Early Summer

It is windless in Groningen today. Although it becomes warm in the afternoon, the early morning is very cool. Groningen, 07:41, Thursday, 6/28/2018

2611. 月から地球に生還した感覚

昨日と同様に、薄い雲が空を覆っている。今朝は五時半過ぎに起床し、六時あたりから一日の活動を開始した。

天気と同じく、夢に関しても昨日と同じように印象的な夢を見た。夢の中で私は、欧州での生活を終え、日本で再度一年ほど生活することになった。厳密には、パリから世田谷に引っ越すことになった。

夢の始まりは、世田谷のとある駅から徒歩で10分ほどの所にあるアパートの中だった。このアパートは幾分古びていたが、部屋の広さは十分であり、家具なども一式揃っていた。日本での新生活に際して家具を揃える必要がないことは有り難かった。また、このアパートは一階建てになっていて、合計で三つの部屋しかない。

もしかすると、これはアパートというよりも、部屋だけがある平屋を三つ連ねたような居住場所と言った方が正確かもしれない。隣の部屋には、私よりも少し年上の女性が住んでいた。その方の職業は不明であるが、清潔感があり、とても感じの良い方だ。引越してきてからすぐに挨拶に行き、その場で少しばかり話をした。あいにく、一番奥の部屋に住んでいる人は不在であった。雰囲気から察するに、そこは誰も住んでいないのかもしれない。

引越してすぐに何かを始めようとするのではなく、私はスライド式のガラス窓を開け、窓際の地べた に仰向けになった。私は何を考えるでもなしに、目を開けたまま太陽の方向を眺めていた。すると、 一人の友人が私の家にやってきた。友人は以前ここに住んでいたらしく、何か置き忘れたものがあっ たようだ。

それを確認した後、彼はこれから会社に行くと言っていた。どおりで綺麗な格好をしていると思った。一方私は特に何もすることがなかったので、引き続き部屋の中でゆっくりとしていた。しばらくしてから、パリから持ち帰った書籍をどこにどのように配置するかを考え始めた。

私の頭の中には、壁一面が書籍に覆われた部屋になるというイメージがあった。そのイメージ通りに書籍を並べようとすると、突然奇妙な感覚に襲われた。それは確かに突然やってきたが、日本に到着した時にすでに感じ始めていたことだった。それはこの国に適応することの難しさを物語る感覚であった。

あたかも自分が月から地球に生還したかのような感覚があり、景色がチグハクなものに見えてくる。 それは物理的かつ心理的な景色である。こうした景色の変化に対して私は幾分混乱し始めた。いつも思うが、日本から国外へ移住する時は比較的適応が楽なのだが、どうしてその逆は難しいのだろうか。 私にとっては、日本に帰ってきた時の適応がいつも難しい。どこかそれは、精神的な適応障害の一種のようだと形容できる。この障害を癒していくには時間がかかる。だから私はこのひっそりとした場所で生活を始めようと思ったのだろう。

そのようなことを考えていると、隣に住んでいる女性が親切にも銭湯に立ち寄ってから近くのレストランで食事でもどうかと声をかけてくれた。「銭湯?」と一瞬疑問に思ったが、どうやらこの家にはお風呂がないらしい。その申し出を受け、私は外出に向けた支度をしながら、また一年後にはこの場所から離れようと思っていた。

今朝方見ていた夢はそのような内容だった。目を覚ました時、自分がフローニンゲンの寝室にいたことを確認し、どこか安堵感に包まれた。幻想的な赤い朝焼けが寝室の窓の向こうに広がっていた。

夢の中で考えていた通り、母国の何が生きづらさを自分にもたらしているのかをより明確にしていく 必要がある。その要因の候補は幾つか頭の中にある。だが、それらをより精査していかなければな らない。安易に一つの要因に還元することをせず、また特定要因の表面だけを見ていてはならない。 夢の中で感じていたように、「月から地球に生還した感覚」というのはどこか正しいように思う。

私はまだ月に行ったことはないが、適応の難しさは似たものがあるに違いない。私は今日もこの街で生活をする。フローニンゲン:2018/5/25(金)06:39

No.1037: Toward the Transparent River

The transparent sky is showing up in front of my eyes. I wish to flow in this life so as to approach "that" river in the other life. Groningen, 07:58, Friday, 6/29/2018

2612. 旺盛な読書と作曲のパズル性

ここ最近は再び旺盛な読書を行っている。これまでも日々読書を行っていたが、どうしても大学院での研究や講義関係の書籍や論文を読むことが多く、自分が真に探究したいと思うものばかりを読

むことはできなかった。だが今はそうしたことが可能になっている。自らの純粋な探究心に基づいた 読書を日々行うことは、これほどまでに充実感をもたらすのだということに改めて気付く。

今日からは、ルドルフ・シュタイナーが色について解説した"Colour (1992)"を読み始めた。日々作曲実践やデッサンを続けていけばいくほどに、色への関心が高まる。色が私たちの知覚や脳に及ぼす作用などにはあまり関心がない。それよりもむしろ意識の形而上学的な側面から色の特性について考えていくことに関心がある。

また、色に対する理解を深めることで、自分が作る曲にも何らかの変化が現れてくるだろうと期待している。この夏は色々と読む本がたくさんある。それらが全て手元にあることが喜ばしい。ブラヴァツキー、シュタイナー、オーロビンドに関する書籍を読み、美学と芸術一般に関する書籍を旺盛に読んでいく。それに加えて作曲理論に関する書籍も積極的に読んでいく。

和書に関してもこの夏は随分と多く読めるのではないかと思う。森有正先生の日記、辻邦生先生の日記、小林秀雄氏の全集、井筒俊彦先生の書籍の何冊か。それらもこの夏に読み進めていこうと思う。

論文の提出が終わり、完全に夏期休暇に入ったら、一日に二曲作るという実践量を確保したい。一つはバルトークの短めの曲を参考にし、もう一つはバッハの曲を参考にしていく。シンプルなものと複雑なものからの学びを共に大切にする。数日前から、作曲実践の前に楽譜を見ながら参考にする曲を聴き、その後曲によって喚起された内的イメージを楽譜の上にデッサンすることを行っている。

シュタイナーの色の書籍と関係して、これは自分にとって実に意味のある実践だと思う。音楽を色として表現し、色を音楽と表現する。それらの往復運動を繰り返すことによって、いつかそれが自由自在に行えるのではないかと期待している。そうした境地に至るまでこの実践を続けていく。あるいはこれは一生涯にわたって続けていくことかもしれない。それぐらいにこの実践には何とも言えない喜びと充実感がある。

先日街の中心部から自宅に戻っている最中に、作曲のパズル性について考えていた。よく作曲はパズルを解くことに喩えられるが、私は少しばかり違う印象を持っている。確かに、パズルを解くとい

う側面は多分にあるが、そもそもパズルの問題を作るという側面が作曲にあると思う。一つの音を楽譜に置いた瞬間に新たなパズルの問題が立ち現れ、その問題を解く過程の中で問題そのものが発展していく。

そのため、作曲は単純にパズルを解くというものではなく、パズルの問題を作りながら解き続けていく感覚に近いのではないかと感じている。興味深いのは、自分で作ったはずの問題に頭を悩ませながらも少しずつ問題を解いていき、同時に新たな問題を作ろうとする自分の内側の何かがあるということだ。おそらくここには、人間が内在的に持つ差異と反復を生み出す特性、そして自己組織化の特性などが関係しているだろう。そしてそうしたものが個人の創造性と密接に関係していることにも気づく。

現在の私は過去の作曲家が残した曲に範を求めているため、パズルの問題の原型は彼らによって 提示されたものである。それらと向き合っていると、パズルを製作した作曲家たちの意図や内的感 覚が少しずつ見えてくることが面白い。そうした意図や内的感覚をもとに、自らパズルの問題を生成 し、その解決に向けて動き出すというのが今の自分の作曲プロセスのように思う。作曲の持つパズ ル性という特性については今後より考えを深めていきたい。今日もバッハの曲に範を求めて作曲を 行う。フローニンゲン:2018/5/25(金)07:57

No.1038: The Restless Modern Society

Whenever I visit large cities, I always feel restless in this modern society. The restlessness looks asinine to me. Were we born to live in a foolishly fidgety way? Groningen, 08:18, Friday, 6/29/2018

2613. 個性と創造性

薄く曇った空。近くの家の前で工事が始まった。どうやら家を壊し、新しい家を建てようとしているようだ。創造からの破壊と、破壊からの再創造。

ゴミの収集車がやってきて、溜まったゴミを取っている。オランダのゴミ捨て場は一風変わっていて、 金属製のボックスが地面に埋め込まれており、近隣住民はそのゴミ箱専用のカードを持っていて、 カードをかざすことによってゴミ箱が開き、ゴミを捨てる。収集車は金属製のボックスをクレーンで持ち上げ、ボックスの底を開く形で収集車にゴミを流し込んでいく。最初その光景を見たとき、日本でも米国でも見たことのないものだったので物珍しそうに見物していた。先ほど改めてその光景を目にした。

ここ最近はバッハの曲を毎日のように参考にしている。バッハの曲から学ぶべきことは無数にあり、 まだその極一部しか学びを汲み取ることができていない。ただし、バッハの曲を参考にする過程の 中で徐々に見えてくることが増えているのは確かだ。改めてバッハは、モチーフの発展のさせ方が 巧みであると先ほどふと思った。

モチーフの発展に関してはどの作曲家も考えるべきことであり、その他の優れた作曲家もその技術が巧みなことは間違いない。だが、バッハはそうした中にあってさらにその技術が洗練されているように思う。

バッハの曲を参考にする際の楽しみは、楽譜の中に構造的なパターンを見出すことであり、それは モチーフの発見と言ってもいいかもしれない。さらなる楽しみは、そのモチーフがどのように発展し ているのかを発見することである。いつも私は、バッハのモチーフの発展方法に唸ってしまう。時に 全く同じ構造が繰り返されているかと思いきや、少しばかり構造が変化していたりと、創意工夫の精神をそこに見る。

私がどうしても掴みたいのは、そうした変化の中にあるバッハの意図であり、そうした変化を生じさせた感性だ。なぜAというモチーフがA'に変わったのか?という理由を問う質問は正直答えようがないように思う。一方で、AというモチーフがA'に変化した背景にどのような意図があったと考えられるだろうか?という質問ならまだアクセスできる。そして一番重要なのは、そうした知的な理解に加えて、AというモチーフがA'に変化することを促した感性の獲得である。

おそらくこれこそが作曲の才能と呼ばれるものであり、その作曲家の個性と呼ばれるものだろう。つまり私は、バッハの曲を参考にし、バッハの個性の根幹部分を知的かつ感覚的に掴みながら、同時に作曲に関する自らの個性を育んでいくことに従事していると言えそうだ。ここには一人一人の

人間が持つ創造性の根幹が関与している。私たち人間が絶えず内側の感覚を生成するメカニズム ――差異化と統合化の運動や自己組織化能力――は、その個人の固有の創造性に他ならない。

創造性を育んでいくというのは、自己の生成力そのものを育んでいくことであり、自己を涵養することに他ならない。私は作曲実践を通じて、人間発達について随分と多くのことを教えてもらっているように思う。発達現象の本質と創造性の本質。そして自己理解を含めた人間理解。それらの本質探究と理解をさらに深めていくために、今日もまたバッハの曲を参考にし、自分の内的感覚に基づいて曲を作っていきたい。フローニンゲン:2018/5/25(金)08:47

2614. 金曜日のフローニンゲンの午後

幸いにも今日は午後から雨が降らなかった。早朝は薄い雲が空を覆っており、午後に雨が降る可能性が高いと思っていたが、昼食を摂り終える頃には雨が降るような気配はなかった。天気予報を確認すると、もう雨は降らないようであったから、折り畳み傘を持たずに自宅を出発し、大学キャンパスに向かった。キャンパスに向かった目的は、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とミーティングをするためである。

おそらく残すところミーティングも今日を含めてあと二回ほどではないかと思う。もちろん、今後も不定期にツショル教授と会って話をする機会はあるだろうが、今回の研究に限ってみれば、もう残すところそれほどミーティングの回数は多くない。いつものように大学のカフェでミーティングを行った。今日のミーティングはいつものように非常に実りのあるものであり、同時に論文を締め括っていくための洞察をいくつも得た。

私の論文でより強化するべきところは依然として文献調査の箇所にある。まだ誰も研究したことのないトピックを調査することにしたため、そもそも先行研究というものはないのだが、自分が採用する観点や測定基準については先行研究がある。すでに見つけた論文については再度丁寧に読み直し、自分の研究仮説と結びつけていくための適切なストーリーが必要になる。この点については以前から取り掛かっていたのだが、まだ不十分のようである。

この箇所さえうまく乗り切れば、今回の研究を査読付き論文とすることができる、とツショル教授から コメントがあった。それは予てからの理想であり、研究が後半に差し掛かると、査読付き論文でなくと も学会発表のための小さな論文で良いかと妥協しそうになったが、今日のコメントを受けて再度意 欲が高まったように思う。こうした自分を見るにつけ、研究を進めていくにあたっての支援者の意義 を再度実感する。昨年にツショル教授と査読付き論文を執筆した際には、ツショル教授が非常に積 極的に文献調査をしてくださり、私の論文の下書きに非常に分厚い記述を付け加えてくださった。

今回の論文はすでに修士論文の域を超えており、ツショル教授の意思として今回も協働で査読付き論文を執筆したいという考えがあることはとても有り難い。明日は一旦研究から離れ、読みたい書籍を読み耽る一日としたい。

明後日の日曜日は午前中に、木曜日からアムステルダムで始まる国際ジャン・ピアジェ学会の発表の準備をしたい。私の発表は金曜日の夕方であるが、日曜日中に資料の大枠を作っておきたい。 発表時間は質疑応答を含めて20分程度であるから、それほど多くのパワーポイントスライドを作る 必要はない。先行研究、研究の目的、研究手法、研究結果などの骨格を抑えた資料を作っていく。 発表に向けた資料作りが早く終われば、日曜日の残りの時間に論文執筆についてもう一度考えを 巡らせておきたいと思う。

ツショル教授とのミーティングを終え、今日も購入するものがあったので街の中心部に出かけた。いつもの通り、街の中心部は昼間からお酒を飲む人やカフェでくつろぐ人たちの姿をたくさん見かけた。このようにゆったりとくつろいでいる人たちの表情を見るのが私は好きだ。時間がより緩やかに流れ、自分が落ち着いていくのがわかる。

心のゆとりを持って生きること。それは本当に大切なことであり、そうしたゆとりが私たちの人生をより深めてくれるのだと思う。ゆとりがないというのは、何か大切なものを見落とすことを助長してしまう。あるいは、もしかするとそれはすでに何かを喪失し、何かを見失ってしまったことを意味しているかもしれない。街の中心部をゆっくりと歩きながらそのようなことを思った。フローニンゲン:2018/5/25(金)17:51

2615. 静かな土曜日の朝に

静かな土曜日が始まった。今日は五時に起床し、五時半から一日の活動を開始させた。ここ最近 新たに付け加えたヨガの実践を起床直後に行い、心身を活性化させた。

早朝に天気予報を確認すると、今日から来週の木曜日まで気温が高い日が続く。それはこの時期のフローニンゲンには珍しいほどの気温の高さであり、夏の盛りの気温よりも高いぐらいである。それでいて湿度が高くないために、あまり暑さを感じることがないのは救いである。今日もこの二日間に続き、薄い雲が空を覆っている。時刻は六時を迎えようとしており、朝日が雲の合間から顔を覗かせ始めている。

昨日、自分がこれまで通ってきた世界中の様々な道について思い出していた。特に、世界の至る 所に存在しているのどかな散歩道を思い出していた。ゆっくりと何かを考えながら、時に何も考える ことなしに、自分の足でそれらの散歩道を歩いていた記憶が蘇ってきたのである。なぜこのような記 憶が蘇ってきたのかは定かではない。

今朝方も印象深い夢を見た。ここ三日間連続して印象に残る夢を見ている。今朝方の夢に関しては印象に残っているものの、それがはっきりとした形で記憶に残っているわけではない。断片的な記憶ながらも少しばかり夢について振り返っていた。昔通っていた中学校で、小中学校時代を共に過ごした全員の前でスピーチをしている自分。

私を含め、夢の中のその場にいた全員は今の年齢であり、成人である。卒業以来、各人様々な道を辿り、今は本当に皆別々の人生を歩んでいる。なぜ私が代表してスピーチをしたのかは定かではない。スピーチの依頼を受けた時、特に断る理由もなかったのでそれを引き受けた。

スピーチの原稿など準備することなく、私は壇上で即興的にスピーチを行った。それは多分に即興的であったが、一つ一つの自分の言葉をできるだけゆっくりと紡ぎ出していこうとする自分がそこにいた。その場にいた旧友たちは、時に笑いながら、時に真剣な表情で私のスピーチを聞いてくれていた。スピーチを行う私はもう、当時話していた方言が話せなくなっていた。

スピーチの途中でなぜか、引っ越してきてから方言を一生懸命学んだエピソードについて触れた。 あの時の私は、方言の持つ独特な響きに対して純粋に関心を持ち、当然ながら周りの全員がその 方言を話していたがゆえに、幼いながらも方言を学ぶ必要性を感じていたのだと思う。

スピーチが静かに終わりを告げると、夢の場面が変わっていた。次の場面では、先ほどの日本語でのスピーチと打って変わって英語で誰かに対してあれこれと説明をしていた。その場にいたのが誰であり、何を自分が説明していたのかについてはもう記憶にない。だが、英語で説明をしている最中、突然何かを閃き、その閃きが自分にとって極めて大切なものであったがゆえに、随分と興奮している自分がいたことを覚えている。今朝方はそのような夢を見た。

先ほどよりも朝日が強くなり、穏やかな風が吹いている。今日は土曜日であり、自由な時間が十分あるため、旺盛な読書を行っていきたいと思う。それらの読書に目的などほとんどない。今の自分が読みたいと欲するがゆえにそれらを読む。至ってシンプルな行動原理がここにある。フローニンゲン: 2018/5/26(土)06:14

2616. 失われゆく真理と叡智

早朝の空を覆っていた雲がどこかに消えている。今はうっすらとした青空が広がっている。とても穏やかな雰囲気を漂わせている土曜日の午前中。小鳥の鳴き声が辺りにこだましており、時折目の前の道路を車が走り抜けていく。

書斎の窓から外を眺めてみると、犬の散歩をしている人やランニングをしている人の姿を見かける。 穏やかな太陽の光りが街路樹を照らし、街路樹は優しい風に揺られている。

未だ眼の開かれぬ眠った人たちは真理など存在しないと述べるかもしれないが、そう述べるのは眼が開かれていないからであって、未だ眠っているからだ。先ほど、失われゆく真理について思いを馳せていた。真理がこの世界からどんどん失われていく。実際には、真理は常にそこにあるはずなのだが、喪失感が自分の内側に漂う。この世界は真理を失いつつある。そんな危機感を持っているのは私だけではないだろう。

真理の喪失は、そのまま叡智の喪失につながると言っていいかもしれない。過去の叡智が失われ、 まだ見ぬ叡智がないがしろにされてしまっている。現代社会は真理や叡智を持たずしてどこに向か おうとしているのだろうか。

明日明後日あたりに集中して座禅をしようと思い立った。これは本当に突発的なな思いつきであり、 同時に重要な思いつきであると言えるかもしれない。「思いつき」というよりもむしろ、何かに促され て私は座ることを決意したように思える。座禅をしなくなってからしばらくたった。少なくともここ数年 間は座禅をしておらず、欧州に来てからは一回も座った記憶がない。

確かに、毎日シャバーサナ瞑想のような形で昼寝をしているが、瞑想実践に関してもここ数年は時間を取って行うことなどなかったように記憶している。それがここにきて突如、座れという促しのようなものがあった。この現象については説明がつかないため、これ以上語ることをしないが、明日明後日にはこの促しに従う形で久しぶりに座禅をしてみようと思う。どれだけ座るかはわからないが、できるだけ長く座ろうと思う。午前中に諸々のことを済ませ、午後から夜まで落ち着いた形で座ろうと思う。

先日、自分の内側にある内在的かつ刻印された日本人性を触知する経験をした。その日本人性は自分にとってとても大切なものとして知覚された。その時の体験を思い出しながらデッサンをした。 描かれるデッサンを眺めてみていつも驚かされるのは、その多様性だ。

それは内的感覚が多様であるからに他ならず、それが千変万化するような性質を持っているからだ。 自分の内側の感覚もしくは心的イメージと呼ばれるものをデッサンするというのは、自分にとってと ても実りの多い実践のようだ。それは気づきの面においてもそうであるし、治癒と変容の面において もそうだと言える。この実践は引き続き継続させていく。

自分の内側にある日本人性を超えて、誰しもの内側にある普遍性の発見に向けて一歩を踏み出していこうと思う。これはいつもと同じような決意のように思えるが、決意のたびにそこに含まれる意味はより深いものになっていく。新たな意味と新たな行動が何かを開いていくようだ。フローニンゲン: 2018/5/26(土)11:04

2617. 無意識の騒ぎ

今日は午前中の途中から非常に良い天気になってきた。先ほど近所のスーパーに行ってきたが、 この天気の良さは大変心地よかった。

スーパーに向かうまでの道は現在工事中である。今日は土曜日にもかかわらず、道には工事に勤 しむ作業員の姿があった。工事現場の近くにラジオが置かれており、オランダの流行歌が心地良い 風に乗って運ばれてくる。曲そのものはポップなものであり、どこかその曲は作業員に活力を与えて いるようだった。

今日は早朝にプラトン全集の続きを読み、ルドルフ・シュタイナーが音楽について論じた"Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)"を少々読んだ。後者に関してはちょうど今日から読み始めたものである。

昨日にはシュタイナーの色彩に関する書籍を読み終え、その書籍の中にも音楽に関する記述があった。現在、シュタイナーの芸術論、とりわけ音楽に関する思想に大きな関心を持っている。それを咀嚼するには随分と時間がかかるだろうが、これも焦らず、今年一年何度か繰り返してシュタイナーの書籍を読んでいこうと思う。

今日は五時に起床し、そこからすぐに一日の活動を開始していたためか、起床から六時間を過ぎたあたりで一度頭がぼんやりしてきた。そのため、10分ほど仮眠を取ることにした。仮眠を始めてほんの数分も経たないうちに、意識が夢見の状態になり、そこで内的イメージの変遷を眺めていた。もの凄い速さで空を飛んでいる内的ビジョンが立ち現れ、隣には誰か別の人間も一緒になって空を飛んでいるようだった。

その人間は確かに人間なのだが、形は人間ではなく、もっと小さな別の生き物だったように思う。声は人間であり、身体は見たことのない生物のそれだった。私はその生命体と二、三言葉を交わし、高速で空を飛び続けた。ある瞬間、突然大気圏上に到達し、そこから一気にパラシュートで地上に降りていくようなビジョンが見えた。

すると、私の眼の前にいた謎の生命体がパラシュートごと気流の渦に吸い込まれ、救助しようと後を 追った私も気流の渦に飲み込まれた。渦から天空にはじき出されると、そこには静けさで澄み渡る 青空が広がっていた。その光景を目撃した瞬間に、10分間に設定していたタイマーが切れ、アラー ム音楽のバッハの曲が鳴り響いた。

ここ数日間、自分の意識の状態がどうも騒がしい。覚醒意識が騒がしいのではなく、無意識の層が 騒がしいのだ。連日印象に残る夢を見ているのもおそらくそのせいであり、昨日突如として、近々長 時間にわたる座禅をしようと思ったのもそのためだろう。座禅に関しては近々というよりも、明日の午 後にでも実践しようと思う。

無意識の中で形を求めて外側に出ようとしているものには形を与え、少しばかり無意識に平穏さを与えたいと思う。フローニンゲン:2018/5/26(土)13:04

No.1039: Sprung Water from Ruins

All of us possess ruins in our inner world. Water is sprung from the ruins. We leave there, looking at or drinking the water. The ruins have inherent raison d'êtres. Groningen, 07:53, Saturday, 6/30/2018

2618. 時空を超えた対話

今日は午後に仮眠を取った後、作曲実践を行った。現在その曲はまだ作りかけであり、夕食後から 続きに取り掛かる。

作曲は自らパズルの問題を作り、自らそれを解いていくようだ、ということについて先日書き留めていたように思う。その後改めて考えてみたところ、自分が作ったパズルが自ずから問題を解決するように自己組織化を促すように音の空間を作っていく、と述べた方が正しいかもしれないと思い直した。あるいは、曲が本来持つ自己組織化の力、すなわち曲が持つ発展力・生成力が自然な形で引き出されていくように音楽空間を構成しながら音を導いていく、と述べることができるかもしれない。

ここで一つ気付いたのは、作曲は音楽空間を生成するのと同時に、そこには紛れもなく、音楽時間を創出することも行っているということだ。その曲に固有の音楽時間と作曲者自身の内的時間が織

り成す特殊な時間がそこに生まれているように思う。作曲とは音楽言語を用いながら空間と時間を 創出することなのではないかと考える。

今日もバッハの曲に範を求め、バッハの楽譜を眺めていると、まさにバッハと対話をしているような感覚になる。単純にバッハが提示したパズルを解いているのではなく、パズルを通じた対話がそこにある。音楽言語を通じて過去の偉大な作曲家と対話をするというのはとても不思議な感覚だ。おそらくそうした対話は、私が音楽理論により習熟し、作曲の技術を高めれば高めるほどに深いものになっていくに違いない。

時代を超えて残っている楽譜を読んでいると、日本古代の和歌が収められた書物を読むような感覚に近いものが引き起こされる。どちらも作者はすでにこの世にいないのだが、作品の中に作者は生き続けている。これが創造活動を通じた永遠性の獲得である。楽譜を読むことにせよ、和歌が収められた書物を読むにせよ、それ固有の言語体系に習熟する必要があるが、その習熟が進めば進むほど、今は亡き過去の時代の人々と対話をすることができるというのはなんと素晴らしいことだろうかと思う。

芸術作品を残した彼らが生きた固有の時代感覚を少しでも感じるためにも、そして作者自身の内的感覚をより深く理解するためにも、その芸術が育まれた領域の言語体系に習熟していきたい。そして何よりも、作品世界の中に入って対話を行っていく感覚と感性を磨いていくことを大切にしたい。

少しずつ、時間と空間を超えて過去の人間たちと芸術作品を通じた対話が行えればと思う。それは きっと自らの人生をより豊かにし、この世界への関与もまたより深いものにしてくれると思う。フローニ ンゲン:2018/5/26(土)18:39

No.1040: A Reticent Dwarf

A reticent dwarf walks today, too. He or she is living again today without being recognized by anyone else. Groningen, 08:10, Saturday, 6/30/2018

2619. シュタイナーの芸術教育思想の探究に向けて

今日も昨日に引き続き五時を少し過ぎた頃に起床した。起床直後、いつものように体を少し動かし、 五時半過ぎに今日の活動を開始した。

まずは起床した直後の内的感覚をデッサンした。これはもう完全に習慣になったようだ。ここ数日間描いてきたデッサンと比較すると、今日は色や形が穏やかだ。確かにここ数日間は、自分の無意識が幾分騒がしかったように思う。実際に、それは夢となって現れていた。

今朝方も確かに夢を見ていたが、それほど強い印象を残すものではなかった。無意識の活性化についてもどうやら周期があるようだ。それは、無意識のどの階層がどれだけ激しく揺れているかに応じて色々な姿を取るように思う。ここ数日間経験していたのは、無意識の深い階層の比較的大きな揺れだったように思う。今は揺れがひと段落し、次の周期に向けてまた静かに歩き出したかのような状態だ。

今日は本当に穏やかな日曜日だ。六時を迎えようとしている現在、朝日が赤レンガの屋根に照らされている。同時に、家々の前に植えられた木々の影が屋根に映し出されている。空は晴れ渡っており、雲一つない。遠くの空はまだ少しばかり赤味を残している。

気づかない間に街路樹も完全に葉っぱを茂らせ、書斎の窓から見える景色は随分と色彩鮮やかな ものになった。小鳥の鳴き声が遠方から聞こえてくる。一つ、また一つと、早朝の爽やかな風がフロー ニンゲンの街を吹き抜けていく。

今日は昨日予定していたように、午後からはゆっくりと座禅をしようと思う。上述の通り、もう私の無意識は随分と落ち着いているが、ここでさらにそれを落ち着かせるような実践を意図的にしたいと思う。仮に座禅によって無意識が再度活性化されたとしても、その活性化はさらに深い安静を無意識にもたらすだろう。午後からゆっくりとした時間を取るためにも、午前中は幾つかの仕事をこなしたいと思う。

一つは協働プロジェクトに関するレポートの最終版の作成であり、もう一つは共著の書籍の原稿を レビューすることである。どちらも共に昼食前に完成させたいと思う。こうしたレビューに並行して、 昨日から読み始めたルドルフ・シュタイナーの"Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)" を読み進めていく。上の階に住むピアニストの友人はシュタイナー教育を受けていたそうであり、先日色々と話を伺った。

今の私は、とりわけシュタイナー教育の中でも芸術教育に関心がある。シュタイナーが提唱した芸術思想に関する書籍は、手に入るだけ全てのものを購入した。この夏は、色彩に関するシュタイナーの思想と音楽に関する思想について理解を深めていくことに時間を充てる。それはこの夏のみならず、今年一年を通しての探究項目になるだろう。

シュタイナーの芸術教育に関する思想と美学の探究が今年一年の鍵となり、それらの主題は今後の人生の中でも中核的なものになるだろうと予感している。フローニンゲン:2018/5/27(日)06:12

No.1041: Rhythm of Fresh Verdure

The climate of Groningen in this season is impeccable. The shining sun, a pleasant breeze, the beauty of fresh verdure; what makes me feel invigorated is innumerable. In such an environment, I suppose that I am asked everyday how I live my life. Groningen, 08:26, Sunday, 7/1/2018

2620. アポロン神殿に向かう道

美しい青空が今目の前に広がっている。一筋の白い雲が空に一筆書きにされている。

朝食の果物を食べながら、私は壁に掛けているニッサン・インゲル先生の二つの作品に見入っていた。何かを考えることなしに、ただ作品に見入る。それをしばらく続けていた。果物を食べ終えると、インゲル先生の二つの作品を綺麗にしようと思った。ここしばらく手入れをしていないことに気づき、ホコリを拭き取った。心なしか絵の表情が澄んだものになったように思う。

このところ芸術教育に対する関心が日増しに強くなっていく。子供のみならず、成人に対する芸術教育への関心が私を捉えて離さない。今朝読んでいた書籍も芸術に関するものであり、同時に美に関するものであった。美は美であるゆえに私はそれに惹かれているのだと思う。非常にシンプルな理由である。

だが、その他にも美なるものに惹かれている理由がある。より厳密には、美を取り巻く様々なことに対して強い関心を持っていると言った方がいいだろう。それらについてはこれまでの日記で断片的に書き留めているため、あえてここでは何も書かない。ただし、今後はそれらの断片的な関心事項のそれぞれをより深めていくことが大切になる。とにかく芸術教育と美学を起点にして、これからの探究を前に進めていく。

何かを知ってから文章を書くのではなく、書きながら知っていくということ。考えてから書くのではなく、書きながら考えることの大切さを改めて思う。人は何かを知ってから文章を書こうしがちであるが、それでは何も書けない。また、人は何かを考えてから文章を書こうとするが、それでは何も書けない。なぜなら、書くという行為はそもそも知ることや考えることに先行しているからだ。

知らないものを知るために知らないままに書くことの大切さがここからわかる。何かを知ろうと思ったら、何かを考えようと思ったら、まずは書き出してみることが重要なのだ。私はこの重要性を日記の執筆を通じて痛切に実感している。日記の執筆がなければ、欧州でのこの二年間において自分は一体何を知れたというのだろうか。

ここで述べているのは外面的な現象に対する理解というよりも、自分自身に対する理解という意味 だ。日記の執筆がなければ、この二年間を通じて一体どれほど自分について知れたであろうか。ソ クラテスがデルフォイのアポロン神殿で「汝自身を知れ」という啓示を受けたことをふと思い出す。来 年の春にアポロン神殿を訪れてみようと思う。その必要性と要求を強く感じる。自己を知ることに終 わりはなく、文章を執筆しながら自己を理解していく試みはこれからも続けていく。

言葉の持つ色や形に対する感覚が幾分鋭敏なものになってきた。一つ一つの言葉が持つ独特の 色や形を用いながら、日々の経験を形にしていく。とりわけ、日々の生活の中で喚起される感動・充 実感・幸福感を言葉を通じて形にしていく。しかもそれはできるだけ絶えず行っていくようにしたい。

自らの内的感覚を起点にし、それを外側に造形していくことを通じて、自己の本質、さらには人間 存在の本質が少しずつ明らかになっていく。 風の穏やかな日曜日。今日もまた日記を書くことになるだろう。なぜなら、日々の瞬間瞬間に自分 の心を動かすものが潜んでおり、私は絶えずそれに触れているからだ。フローニンゲン:2018/5/27 (日)10:34

No.1042: Open Palms

It is Sunday on which I unintentionally open my palms to the boundless azure sky in front of my eyes. My ego almost dissolves into the outer world. Groningen, 08:47, Sunday, 7/1/2018